

《心臓を食べる話》

——『イニョール短詩』の場合——

岡 田 真 知 夫

中世に書かれた《心臓を食べる話》——不貞の妻に夫が恋人の心臓を食べさせる——を語る一群のテキストは、一旦テキスト相互間の系統関係を離れてみた場合、テーマの扱い方の相違から三つのグループに分類できると思われる¹⁾。

第一は、当時の恋愛理念《amour courtois》ないしは《fine amor》を枠として、話を悲劇として語っているグループである。テキストの数は最も多く、内容から見ても、正統的な系譜を成していると思われる。ジャクメスの『クレーン城代とファイエルの方の物語』、ギリエム・デ・カベスターニュの「伝記」と「解題」などがこれに属する。このグループに属する作品の特徴は、夫を憎むべき加害者とし、妻とその恋人を被害者として描いている点にある²⁾。ただし、ギリエム・デ・カベスターニュの「伝記」ないしは「解題」に取材したと思われる『デカメロン』4日目第9話をこのグループに入れるのはいささかためらわれる。このノヴェルラで展開される愛の悲劇は、《amour courtois》の枠を越え、より人間的な現実に近い事件として読者の目に迫ってくるからである。それはまた、夫と妻の恋人となる男が固い友情で結ばれていたことが殊更に強調されている点や、食事後、妻が、非は自分にあり、男を恋人にすることで夫の名誉を傷つけたと自ら認めている点で、或いは夫と男の間には普通以上の愛情関係があって、夫は、男を奪った妻と妻に「奪われてしまった」男に復讐しているのだと解釈することも、あながち不可能ではないことによる。『デカメロン』の話は分類の埒外に置いておいた方がいいだろう。

第二のグループに属する唯一のテキスト、15世紀の説教集 *Sermones parati* の一話は、第一のグループに属する作品とは正反対の立場をとり、教会の立場

2 『イニョール短詩』

から、不貞を不貞として断罪している。筋立ては、第一のグループに分類される『クーシー城代とファイエルの奥方の物語』やコンラット・フォン・ヴェルツブルクの『心臓譚』と同巧異曲で、心臓は、聖地で死の床に伏した男自身の意志で、フランスの女の許に送られている。ごく短いものなので、ここに訳出し、《心臓を食べる話》の概要をとりあえず明らかにしておこう。

或る騎士が破廉恥にも (turpiter) 他の騎士の妻を愛してしまった。ところがその騎士が海を渡ることになった。騎士はかの地で病いをわずらい死を迎えたが、女に対する愛ゆえに正気を失い (fatuus) 盲いていた (excecat) ので、聖体を拝受しようとも悔悛しようとしなかった。それどころか、召使いに、自分が死んだら心臓を聖体器に (in pixide) 入れて恋人の許に送り届けるように命じたのである。召使いは、言われた通りにして戻り、主人の奥方の城に入ろうとしたが、夫が目の前に現われて、海の彼方の国から何を持ってきたのかと問い質した。ところがなにも答えないので、夫は言うように強いた。そして彼は、聖体器に収められたその心臓を受けとり、よく料理して妻の食に供したのである。妻が食べてしまうと彼はこう言って尋ねた、「おまえは海を渡ったあの騎士を愛していたのだな。」しかし彼女は顔を赤らめて話せずにいた。そこで騎士が言った、「妻よ、知るがよい、おまえは、海の彼方の国からおまえに送られてきたおまえの恋人の心臓を食べてしまったのだ。」すると彼女が答えて言った、「では、それ程のものをいただいた以上、私は以後決して他にはなにも口にいたしません」Et certe ego post illum cibum nunquam alium cibum comedam. そして彼女は自ら命を絶ってしまったのである。以上が、情欲 (luxuria) がこの二人の者の正気を失わせ、盲いさせた次第である³⁾。

第三のグループに入れるべき『イニョール短詩』と『ノヴェルリーノ (古譚百話)』第 62 話では、心臓料理にあずかる女性は複数であり、話はむしろ喜劇仕立てになっている。作者は、第一のグループが真面目に取りあげている題材を、いわばこけにしているのである (特に『イニョール短詩』にこの傾向が著しい)。Sermones parati の一話とは別の行き方で、恋愛が必ずしも理想主

義的に眺められてばかりいたわけではないことを伝えている点で、それなりに貴重な時代の証言と看做せよう。本稿では、このグループに属するふたつの作品のうち『イニョール短詩』のほうを紹介し、『心臓を食べる話』を扱う作品群の一端を明らかにしてみようと思う⁴⁾。

*

* *

ブルターニュのリオル (Riol) に生まれたイニョール (Ignaure) は、さほど身分は高くなかったが、肩を並べる者もないほど武芸の誉れが高く、まただれよりも陽気な騎士だった。イニョールはリオルの城市にいた12人の君侯の妻を次々に征服したが、一年余りの間それぞれの女性は自分一人だけが愛されているものと思い込んでいた。

偶々、聖ヨハネの祭日に、この12人の貴婦人が野原に出て一風変わったゲームを始める。司祭役(審判)を一人選んで、残りの11人が司祭に自分の恋人の名を告白し、「だれが一番高貴な愛を享受しているか」*Li quele aime plus hautement* (v. 94) 決めようというのである。勿論、選ばれた司祭に11人の女が次々に告白した男の名は皆イニョールだった。「聴聞」を終え判定を求められた司祭役の女性が答えて言う、「まったくのところ、皆さんが私におっしゃったのは、同じただ一人の騎士の名。こんな卑劣な仕打ちであるかしら。実は私自身も彼を愛しているの。そして皆さんまでが同じように彼のことを愛してらっしゃるなんて！」⁵⁾

怒り心頭に発した女たちは、早速仕返しの手筈を整える。はじめにイニョールが会いに行った女が、野原での逢引を約束させ、ほかの女たちは手に手にナイフを持ってそこで待ち伏せしようというのである。自分のドン・ファンぶりが露見したことなど露知らぬイニョールは、女たちの罠にまんまとはまりこんでしまう。尤も、言葉巧みな命乞いによってあやうく命は奪われずにすむのだが、女たちも簡単には無罪放免してくれず、12人の中から一番好きな女性を選んで、以後その女性にのみ愛を捧げるべしという条件を出してくる(実は、どの女も諦め切れないのである!) 命にはかえられず、やむなくイニョールはこの

4 『イニョール短詩』

条件を飲み、提案した当の女性——「告白遊び」の司祭役と同人物——を選ぶ。

ところが、相手が一人になってしまったためか、イニョールは以前に増して足繁く選んだ貴婦人の許に通うようになる。そして遂には一旦はとりとめた命を失うことになるのである。

一方、この間の事情は例の「中傷者」losengier (v. 378) の察知するところとなり、偶々会食の席に集まった12人の夫の前で暴露されてしまう——「皆さんはたった一人の男にコキユにされているんですよ！」D'un seul homme estes tout huihot! (v. 412). 今度は、夫側のイニョールと妻に対する報復が始まる。まもなくイニョールは、「告白遊び」の一件の後もお妻を寝取られ続けていた夫によって、現行犯で取りおさえられ、幽閉されてしまう。早速、イニョール逮捕の報せが女たちの間に伝わる。12人の女性は、イニョールの命乞いのために、一斉にハンガーストライキに突入するが、4日目には夫たちの忌むしい計画が実行に移されてしまう。イニョールは、彼らの手によって心臓を抜き取られるだけでなく、アベラールと同じ運命に見舞われ、男として最も大切にすべきものまで切り落とされてしまうのである。かくて12等分された彼の肉体のある一部と心臓の料理が、女たちの食に供される。空腹が極に達していた女たちには、もはやストライキの続行は不可能だった。夫らの甘言にのせられて、到頭この世にも珍しい料理を食べてしまうのである。料理を口にし、気を取り戻した女たちは、口々に夫に向かってイニョールの釈放如何を問い質す。そこでの「告白遊び」の司祭役を務めた女性に、その夫が真相を明かす——おまえが食べたのは、生前求めてやまなかったイニョールの肉体の一部である、と。「司祭」さんから事の次第を伝えられた女たちは皆、もう何も食べないと誓い、今は亡き恋人の死を悼みながら死んでゆく。

以上が『イニョール短詩』の概要である。一読して明らかなように、同じ「短詩」laiの名をもつマリ・ド・フランスのいくつかの作品から得られるのと同質の感興をこの作品に求めても無駄である。勿論、この短詩にそれなりの魅力がないというのではない。他界と現実世界の境界を越えるギジュマールやランヴァルの冒険とイニョールの運命のどちらにより興味をそそられるかは、読

者によって自ずと異なると思えるのである。

自ら名乗り出ている 作者ルノー⁶⁾の語り口には、猥雑さは否めないにしても、つばを心得たパロディー作家の精神が読みとれることも確かである。たとえば、世にも珍しい食事に与った女たちが、その後食を絶ってこの世をあとにする前に神に誓ったという言葉は、第一・第二のグループに属する作品で女が宣言する言葉を逆手に取っている。

A Diu fisent toutes un veu :
K'eles ja mais ne mangeroient,
[Se] si presieus mès n'avoient. (vv. 584-6)

「これ程貴い料理にありつけるのでなければ、もう決して物を食べない」——これは、「これ程貴い料理にありつける筈は決してないから、もう絶対ににも食べない」というに等しく、例えば、クーシー城代の心臓を食べさせられたファイエルの奥方の言葉と同じように、食を絶って自らの命に終止符を打つという意志を伝えてはいる。

《Je vous affi certainement
K'a nul jour mes ne mangerai
N'autre morsiel ne mettrai
Deseure si gentil viande.》⁷⁾

しかしながら違いも大きい。ファイエルの奥方が「これ程貴い料理の上にほかの食べものをのせまい」というのは、クーシー城代の心臓＝心が象徴する愛をけがしたくないからであろう。12人の女が言う「これ程の料理にありつけるのでなければ——ありつける筈がないから」とでは、大分食を絶つ理由が違うではないか。もうひとつ明らかに違うのは、食べた料理の内容である。ファイエルの奥方が食べたのは、クーシー城代の愛が宿っていた心＝心臓だけであり、それはまた二人の愛＝《心の交換》の対象でもあった⁸⁾。ところが、12人の女が食べたのは心臓だけではない。むしろ、心臓は料理のかさを増すための単なる添えものに過ぎないのである。このことは、イニョールを召し捕った夫の提案の言葉を見れば明らかである。

6 『イニョール短詩』

《Au quart jor [prendons] le vassal
Tout le daerrain membre aval
Dont li delis lor soloit plaie,
Si en fache on un mangier faire;
Le cuer avec nous meterons.》(vv. 541-5)

「……ついでに心臓も加えましょう。」なにしろ12人もいるのだから、心臓でも加えないことには、皿に盛って食べてもらうに足る量の料理は出せない。しかし12人というのは「実際ちと多い」ce qui en vérité est un peu beaucoup⁹⁾。食事後、「告白遊び」で司祭役を演じた妻に真相を明かす夫の言葉も、料理の主品は——少なくとも食べさせた夫側にとって——心臓ではなかったことを教えている。

《...Dame prestresse,
Ja fustes vous sa maistresse.
Mangié avés le grant desir
Ki si vous estoit em plaisir
Car d'autre n'aviés vous envie.》(vv. 565-9)

(v. 567の*desir* はルジュヌ女史の注¹⁰⁾ に倣って《l'objet de désir》の意に解しておこう。)更に付け加えれば、『短詩』を締めくくる作者自身の言葉からも、この作品が、心臓を抜き取られたというよりは、démembrer された男の話であったことが読みとれるだろう。

Si fu por Ignaure trouvés
Ki por amours fu desmembrés. (vv. 663-4)

このように、ルノーは、《心臓を食べる話》^{かなめ}の要ともいうべき妻の科白の価値を、12人の女に似たような言葉づかいをさせながら、実は完全に変えてしまっているのである。forme を似せつつ contenu を覆すパロディー作者の面目躍如たるところというべきか。

既成の表現の価値を転移ないしは転覆させる似たような手口は、作品中二度にわたって出てくる諺らしき言い廻しにも認められる。——恋の相手がただ一

人になってしまったイニョールが、足繁く女の許に通うようになると、作者は警句のように *Soris ki n'a c'un trau poi dure* (v. 373) という一行を置く。そして同じ表現は、イニョールが夫に取りおさえられたことを告げる直前に *La soris ki n'a c'un pertruis/Est molt tost prise et enganee* (vv. 480-1) と繰り返される。裏返せば、12人の女性を相手にしていた時のほうがイニョールは安全だったということになるわけだ。この露骨な表現は¹¹⁾、実は、既にある二種の諺を組み合わせで作った似非諺に他ならないのである。――

人間を悩ますねずみは通り穴をひとつならず心得ているらしい。

*La soriz set plus d'un pertuis.*¹²⁾

また、抜け穴がひとつしか頭に入っていないねずみは出来がよくないともいう。

*La souriz est mauvese qui ne set c'um pertuis.*¹³⁾

こうしたねずみを種にした諺と、もう少し一般的な真理を述べた *Qui ne scet que une voye est tantost prins*¹⁴⁾ というような諺を知っていれば、ルノーがでっちあげたような諺もどきをひき出すのは容易である。

ルノーが作品にちりばめているきわどい冗談はこれだけにとどまらない。ルージュヌ女史の指摘になる¹⁵⁾この種の表現が使われている箇所をあと二つだけ引いておこう。ともに、「告白遊び」のシーンで、女性同志の間で交される言葉である。一つ目は、「司祭」さんが「告解」する女性の一人をたしなめる言葉。

《*Douche suer, mais batés la crupe :*
Ki vous fait faire les pechiés
Dont vostre cors est entechiés !》(vv. 124-6)

二つ目は、別の女性と「司祭」さんとのやりとり。解りにくいかと思うので、訳をつけておこう。

――《*Dites, dame, comment a non,*
Cil ki de vo cuer a le don ?》
 ――《*C'est cil dont li païs resonance.*

On le doit nommer quant il tonne :
 Ja puis ne carra cos en l'estre.》
 —《Fali avés》, che dist li prestre !
 《Vous l'avés nommé pluisours fois,
 Onques por çou n'eüstes defois
 Que li caus sour vous ne kaïst !
 Ja li nons ne vous garesist,
 Mais ne fu pas brisiés li caus.》
 —《Dex me ramaint a iteus caus,
 Ne plaing pas la bonne fuison !》 (vv. 179-91)¹⁶⁾

「おっしゃって、奥様、なんと言うの、あなたの心を授かった男性の名は。」
 「国中に鳴り響いている方よ。雷が鳴るときにはあの方の名を呼ばなくてはならないわ。そうすれば雷はもうそこには落ちないもの。」
 「あなたのおっしゃることは間違っているわ」と司祭が言った、「あなたは、その人の名を幾度も呼んだのに、雷がああなたの上に落ちないようにしたことなど一度もないのでしょ！その人の名を呼ぶことであなたが救われたとしても、雷は決して撃退されなかったのだわ。」
 「神よ、あのような雷にもう一度私を引き合わせたまえ！どれほど多くとも文句は申しません。」

ルジュヌ女史の注¹⁷⁾に従って説明を施せば、*cos*, *caus* は《coups》であり、ここでは《coups de tonnerre》を意味している。Vv. 181-3は、或る種の人間や物に雷を撃退する能力があるとする民間信仰を下敷きにして読めばよい。そして、この「告解者」が言うように（《Ignaures a non au franch cuer/ Dont toute Bretagne fremist.》 vv. 194-5）、イニョールの武名はブルターニュ全土に浸透していたことを思い合わせれば意味は通じる。V. 184以下は説明を要すまい。

さて、こう見てくると、『イニョール短詩』は度し難い *pornographie* と思われるかも知れない。しかしそう断じるのは早計である。その種の作品に個有の価値を認めないことの是非は問わないとしても、この作品が *pornographique* なのは、《心臓を食べる話》のパロディーを狙っていることと不即不離の関係にあるからである。それに、一読してわかるように、作品全体が *courtois* な雰

団気に包まれていることも忘れてはなるまい。作品の後半では、主人公が殺され、肉体の一部を切り取られていながら、そして12人の女性がそれを食べ、遂には自ら命を絶っているが、われわれ読者には、悲しみは勿論のこと、嫌悪も覚えることが出来ないのは、おそらくそこに起因する。フーレが、この短詩を評して、「輕妙で所々気の利いたファブリオ」fabliau alerte, spirituel parfois と書いているのも故なしとしない¹⁸⁾。ここで、デュビュイが『放蕩者の短詩』*Lai du Lecheor* について誌している言葉を引いてみるのも悪くはあるまい。同じ言葉が、そのまま『イニョール短詩』にも当てはまるからである。

Un sujet digne d'un fabliau, mais un ton digne d'un lai, c'est la définition même de la parodie!¹⁹⁾

宮廷風恋愛文学 (littérature courtoise) の背景なしに「考えられない」inimaginable というニクログのこの作品に関する見解も²⁰⁾、ルノーが揶揄すべき対象をよく心得ていたことを指しているとみたい。

ここで自ずと一つの問題が浮かび上ってくる——ルノーが茶化している《心臓を食べる話》を扱う 具体的な 作品があるのか、あるとすればどの 作品なのか。『イニョール短詩』は、その戯画を描くべき先行の 作品があって始めて読者を得る種類の 作品だからである。『短詩』の「これ程貴い料理にありつけるのでなければ、もうなにも食べない」という12人の女の誓言も、別の《心臓を食べる話》を扱う作品における食べた女の「これ程貴い料理を食べてしまった以上、以後決して他の食物を食べてこれをけがすことはすまい」という内容の科白を前提としない限り、意味を成さない²¹⁾。ところが、こうした言葉を現に含む『クーシー城代と ファイエルの奥方の 物語』(13世紀末) も、ギリエム・デ・カバスターニュの「伝記」「解題」(13世紀)、『デカメロン』(14世紀中頃)、あるいはコンラット・フォン・ヴュルツブルクの『心臓譚』(1287年以前) も、いずれも13世紀初頭の作と推定される²²⁾ 『イニョール短詩』より後に書かれている。《心臓を食べる話》を扱う作品で、『イニョール短詩』よりも古いのは、トマの『トリスタン』(1150-60年、但し論者によってはクレチヤン・ド・トロワの『クリジェス』—1175年頃—よりも後) がその要約を伝える『ギロン短詩』

10 『イニョール短詩』

のみである。(アルナウト＝ギリエム・デ・マルサンの *Ensenhamen*—1170-80年—がその要約を伝えるリニャウラの話は、後述するように《心臓を食べる話》とは看做し難い。) 従って、『イニョール短詩』の攻撃対象は、『ギロン短詩』か、さもなくば推定上の作品に求めなければならないだろう。『イニョール短詩』以前における《心臓を食べる話》の広範な流布を想定するのであれば——尤もその証拠は全くないと言っていい——作品は一つと限らなくとも構わないだろうが、筆者は、『ギロン短詩』を、『イニョール短詩』が揶揄した作品と看做して不都合はないと考える。以下にその理由を述べてみよう。

トマがイザーに歌わせている「哀れな愛の短詩」*lai pitus d'amur*²³⁾は、「いかにしてギロン殿が、誰よりも愛していた奥方への愛故に不意を襲われて殺されたか、またいかにしてその後或る日、伯爵がギロンの心臓を巧みに妻に食べさせたか、その次第と、恋人の死を知ったときに奥方が抱いた苦しみ」²⁴⁾を物語ったものであるという。この今日に伝わらない『ギロン短詩』の存在は、ロベール師の『トリスタン・サガ』(1226年)やゴットフリートの『トリスタンとイゾルデ』(1210年頃)の言及によって確かめられている²⁵⁾。トマが伝えているのは、まぎれもなくかつて存在した作品の骨子なのである。しかしながら、残念なことに、ギロン殿の恋人が筆者が求める言葉を口にしたかどうか、この要約は教えてくれない。また、奥方の死に関する言及もここにはない。ただし、「哀れな愛の短詩」という以上、この作品がはじめに分類した第一のグループに属することは間違いあるまい。(ルノーが揶揄した作品もこのグループに分類すべきことは説明を要さないだろう。) ここで注目したいのは、イザーが歌う短詩を物陰で聞いていたカリアドの次のような言葉である。(イザーに空しく思いを寄せていたこの人物は、恋敵たるトリスタンに関する悪い報せを彼女に伝えるのをこととしていた。)

「奥方様、私は、人の死が話題にのぼる時、ふくろうの歌う声が聞こえる
と心得ております。ふくろうの歌声は死を意味するからです。でも私が考
えますところ、あなたの歌声はふくろう自身の死を意味しています。だれ
か今身罷ったのでしょう。」²⁶⁾

持って回った言い方をしているが、ベディエの解釈によれば、この言葉には次のような含みがある²⁷⁾——「あなたの歌は、ふくろうのそのように、私がこれからあなたに申し上げる人の死（トリスタンの死）を報じているだけでなく、知らずに歌っているふくろう自身（あなた自身）の死をも伝えています。」ここでカリアドは、これから報告するトリスタンの白い手のイズーとの結婚が、（金髪の）イズーにとって、トリスタンのみならず彼女自身の死にも等しいと看做しているのである。言い換えれば、トリスタン結婚の情報に、二人の恋人の愛の瓦解を読み取っているのである。そしてこのほのめかしは、明らかに聞いたばかりの短詩の内容——とそれを歌うイズーの歌声が持つ不安な響き——に促されている。『ギロン短詩』を聞いたカリアドのこうした反応の言葉に照らしても、ギロンの心臓を食べた奥方も幾ばくもなく死んだと考えるのが自然であろう。それに、はじめに挙げた《心臓を食べる話》を扱う作品のなかで、食べた女性がその直後になんらかの形で死なないのは『ノヴェルリーノ』第62話だけなのである。——この小話では、食べた女たちは、料理の正体を知ると「この世の名誉」l'onore di questo mondo を失ったと思い、尼僧院を建ててそこに入ってしまうが、それでもなお肉欲から免れられないらしく、通りがかりの男を僧院の中に連れ込むのだ！²⁸⁾——「哀れな愛の短詩」という『ギロン短詩』において、奥方がギロンの死後も生き永らえたというのは、どうしても考えにくいのである。

断食宣言＝自殺の意志表示についていえば、これを欠くのもやはり、『ノヴェルリーノ』の話だけである。『ギロン短詩』に同種の言葉があったとする積極的な理由は確かにないが、なかったとする根拠も見出されない。食事に与った女性が死なない『ノヴェルリーノ』を除く他の全ての作品にあるとすれば、同種の言葉は『ギロン短詩』にもあったと考えたくなる。

『ギロン短詩』を『イニョール短詩』のいわゆる《source》と看做すべきもう一つの理由は、両者がともに「短詩」の名をもつことと、前者がそのパロディーと思われる後者の攻撃対象たるにふさわしい文学ジャンル《lai breton》の一つだったという事実にある。

ル・モルオール対トリスタンの一騎打ちが行なわれる以前に、マルク王の宮

12 『イニョール短詩』

廷に次のようなエピソードがあった²⁹⁾。——夕食後、王の御前で豎琴をひきながら短詩を歌っていたウェールズ人にトリスタンが言う、「師匠、上手に弾いて下さい。そのゴロン殿とその恋人の短詩を作ったのはブルターニュの人々なのです」*Maître, harpez-la bien. Ce sont les Bretons qui ont fait ce lai de mon seigneur Goron et de son amie.* トリスタンに豎琴の心得があることを知ったウェールズの豎琴弾きは、楽器を彼に委ねる。自ら奏でる楽器の調べに合わせて、トリスタンは一曲の短詩を見事に歌い、マルク王や回りに集まってきた人々を感心させる。演奏が人々に受けたのを見て、トリスタンはさらにグラエラン (Graelent) とピラミュスとティスベ (Piramus et Tisbé) の短詩を歌う……。イズーが歌ったという『ギロン短詩』は、『グラエラン』と同様、《*lai breton*》の一つだったのである³⁰⁾。しかもそれは、トリスタンのレパートリーにあったものである。周知のように、トリスタンは、一回目のアイランド行のさいに、イズーに豎琴の演奏法や短詩の作り方を伝授している³¹⁾。師トリスタンから習った短詩を弟子のイズーがロズさんだとしても、決して不思議はあるまい。

他方、『イニョール短詩』のほうは、《*lai breton*》を特徴づける *féerie* ないしは *merveilleux* と形容できる事件の展開が見られない点で (イニョールが蒙ったグロテスクな運命を *merveilleux* といえようか!) 必ずしも《*lai breton*》とは認めがたいのであるが、作品の形式的な枠組は明らかに同じジャンルのそれである。イニョールが生まれた土地の領主 Hohiel (v. 21) = Hoël は、ジョフロワ・ド・モンムートの『ブリタニア王列伝』*Historia Regum Britanniae* で重要な役を演じているブルターニュの伝説的な王であるし³²⁾、『短詩』の舞台もブルターニュに設定されている。

Pour chou, voel roumans coumenchier,
Une aventure molt estraigne
Que, jadis, avint en Bretagne. (vv. 14-6)

また、《*lai breton*》にしばしば見られる先行する作品への言及も、間接的ではあるが認められる。

C'est la matere de cel lay
 Ichi le vous definirai.
 Francois, Poitevin et Breton
 L'apielent le *Lay del Prison*.

.....
 Si fu por Ignaure trouvés
 Ki por amours fu desmembrés. (vv. 657-60, 663-4)³³⁾

このように、ルノーが、自らの作品をブルターニュの伝承に仮託して書き、《lai breton》とは無縁の内容をそこに盛ったのは、フーレが言うように³⁴⁾、《lai breton》自体を嘲弄するためであった筈である。そして、ブルターニュの伝承に組み込まれる作品で、ルノーが自らの作品に冠したのと同じ「短詩」の名をもち、かつまた《心臓を食べる話》を扱っている作品は、『ギロン短詩』を描いてほかにないのである。

以上、ルノーがその戯画を描いた作品が、他ならぬ『ギロン短詩』であったとすべき理由を挙げてみた。その存在すら知られていない作品を想定するよりは現実性があると思うのだが、いかがであろうか。

『イニョール短詩』を《心臓を食べる話》のパロディーにしているのは、とりわけ、食事にあずかる女性が複数であり、料理を構成する主要素が殺された男の生殖器であるという点であろうが、ルジュューヌ女史の研究によれば³⁵⁾、ルノーはこのモチーフのヒントを Ignaure-Linhaura という伝統的なドン・ファンの典型に求めている。『短詩』のイニョールは、ルノー一人の手で作り上げられた人物ではないのである。ルジュューヌの指摘になるこの人物への二つのallusionを挙げておこう。一つは、クレチャン・ド・トロワの『荷車の騎士』(1177-81年)に、ノオー(Noauz)の騎馬試合に参加した騎士の一人として描かれている。

Et veez vos celui dejoste
 qui si bien point et si bien joste
 a cel escu vert d'une part,
 s'a sor le vert point un liepart,

14 『イニョール短詩』

et d'azur est l'autre mitiez :
c'est Ignaures li covoitiez,
li amoreus et li pleisanz.³⁶⁾

Ignaures li covoitiez……という名は、Guivret le petit (*Erec et Enide*), Tristan le nain (Thomas) などと同様に、その人物の特徴——特に後二者は肉体的特徴——を表わす形容語を付した通り名であり、その人物が動く作品中の世界や読者にとって馴染み深い存在であることを前提としている。12人の女性を相手にした『短詩』の Ignaure とこの「引く手数多の恋する優男」Ignaure を別人物と看做すことは難しい。

もう一つの allusion はアルナウト＝ギリエム・デ・マルサン Arnaut-Guilhem de Marsan の *Ensenhamen* に見られる。作品はルジュージュによって1170-80年頃の作と推定されている³⁷⁾。女史の訳を付して引用しよう。テキストも彼女の引用になるものである³⁸⁾。

De Linaura sapchatz,
Com el fon cobeitatz
E com l'ameron totas
Donas e-n foron glotas
Entro-l maritz felon
Per granda trassion
Lo fey ausir al plag.
Mas aco fon mot lag
Que Massot so auzis.
E'n fo, so cre, devis
E faitz iiij mitatz
Pels iiij molheratz.
Cest ac la maystria
De dintre sa bailia
Entro que fon fenitz
E pels gilos traitz.

[Il vous faut connaître Linaura, comme il fut recherché, et combien l'aimèrent toutes les femmes et comme elles en furent avides, jusqu'à

ce que le mari félon, par grande trahison, le fit tuer à un rendez-vous (*plag*=réunion). Mais ce fut une vilénie car Massot tua cela. (*so*: euphémisme pour exprimer que Linaura fut «démembré» comme dans le *Lai d'Ignaure*? Ou ne faudrait-il pas, plutôt, corriger *auzis* qui répète *ausir* à deux vers d'intervalle, et le remplacer par *aizis*? On pourrait alors traduire: «Mais ce fut une vilénie, que Massot ménageât cela!» Le sens me paraît plus satisfaisant.) Et Linaura en fut, je pense, dépecé, et on en fit quatre parts pour les quatre femmes. Ce héros eut la maîtrise dans sa puissance jusqu'à ce qu'il mourut, trahi par les jaloux.]

テキストの解釈について二、三注を施しておけば、——レヌアールとムーザは *Que Massot so auzis* を《que Massot entendit (ouït) cela》の意に解している³⁹⁾。筆者としては——写体の読みに手を加えることは異論の余地のあるところだが——ルジュースの第二のとり方に引かれる。Pels iiij molheratz を《pour les quatre femmes》と訳しているのは、ムーザが指摘しているように⁴⁰⁾、明らかに molherat を molherada と取り運えた誤訳であり、《pour les quatre maris》か、レヌアールのように⁴¹⁾、《par les quatre maris》と訳さねばならない。

ここで、Linaura は、Pâris, Eneas, Yvain, Tristan などの当時有名だった *amant* と並んで挙げられており⁴²⁾、やはり「引く手数多の」cobeitatz 色男だったこと、そして——はっきりと語られているわけではないが——彼の恋の相手が複数（恐らく4人）だったこと、「嫉妬深い」gilos 夫の手にかかって殺され、アベラールと同じ運命に見舞われたらしいことなど、『短詩』の Ignaure との間に無視し難い共通点が認められる⁴³⁾。（切り取られたものが四人の女性の食に供せられたとするルジュースの解釈は、上に述べたように、採用し難い。）

クレチヤンの Ignaure にせよ、アルナウト＝ギリエム・デ・マルサンの Linaura にせよ、いずれも、作者が無から作り上げた人物というよりは、明らかに既知の伝説的な人物として描かれている。では、伝説自体の出所は何処にあるのか。ルジュースによれば、起源は南仏に求められる。

1165-73年に書かれたとおぼしいギラウト・デ・ボルネーリュ（Guiraut de Borneil）の詩に、Linhaura という《senhal》が見られる作品が四つある。うち

二つは《canso》で、一つは Linhaura を相手に《trobar clus》と《trobar plan》の優劣ないしはよしあしについて意見を交わした有名な《tenso》、そしてもう一つは Linhaura の死を悼む《planh》である。ルジュューヌは、コルセンに倣って⁴⁴⁾、この《senhal》が表わす詩人を、「心が広く機知に富む」*généreux, plein d'esprit*「危険なドン・ファン」*dangereux Don Juan* として通っていたとみられる⁴⁵⁾ラインバウト・ダウレンガ (Raimbaut d'Aurenga) と同定している⁴⁶⁾。また、ガウセルム・ファイディト (Gaucelm Faidit) の8篇の詩 (1180年以降) に見られる同じ Linhaura という《senhal》は、やはりドン・ファンの資格を十分にもつトゥールーズ伯レモン6世 (Raimon VI de Toulouse) と同定している⁴⁷⁾。

かくして、二人のトゥルバドゥールが使った Linhaura という《senhal》は、アルナウト＝ギリエム・デ・マルサンの *Ensenhamen* とともに、ルジュューヌに、南仏における Linhaura-Ignaure 伝説の存在を推定する根拠を提供する。クレチャンとルノーについて言えば、両者とも——前者の場合、エレオノール・ダキテーヌの娘シャンパーニュ伯夫人マリーの意図に沿って物語を書いたことから推測できるように、南仏の事情に通じる機会に恵まれていたことから、後者の場合、その方言特徴からブルゴーニュの出身と推定され、地理的に近い位置にいたことから——南仏の伝説に取材しているということになる。

このルジュューヌの南仏起源説に対して、デルブイユは、(アルナウト＝ギリエム・デ・マルサンがどのようにしてそれに接したかについては述べていないが) 北仏に今日に伝わらなかった短詩を想定して、伝説の北仏起源を主張し、ギラウト・デ・ボルネーリュがラインバウト・ダウレンガを指して使った Linhaura という《senhal》については、両二者が、1170年にペイレ・ロジェール (Peire Rogier) やベルナルト・デ・ヴェンタドルン (Bernart de Ventadorn) らとともにピュイヴェール (Puivert) に会した折——(この時ペイレ・ドヴェルニエ Peire d'Auvergne が4人を含む12人の詩人を茶化した有名な《sirventes》を作ったといわれる)——その場にアルナウト＝ギリエム・デ・マルサンも居合わせて、恐らく即興で作った彼の *Ensenhamen* に出て来た Linhaura を拝借したのだろうと、極めて具体的な状況を考えている⁴⁸⁾。

ベルギーの二人の中世文学者の説を紹介したのは、決してどちらか一方に軍配を挙げるためではない。また筆者には、この種の起源に係わる問題に断案を下す用意もない。（確かにルジュヌ女史の説の方が行き届いているが、デルブイユの説にもわかには斥け難い。）われわれにとってここでとりあえず重要なのは、Ignaure-Linhaure という幾人もの女の愛に恵まれるが遂には男性としての機能を奪われてしまうドン・ファンの伝説が、中世フランスの南北両地方にまたがって、一時期或る程度の流布を見たという、両研究者が共に指摘し認めている疑い得ない事実である。ルノーは、この伝説に取材した最後の詩人であり、《心臓を食べる話》にこの伝説を組み合わせた唯一の詩人と看做せらるだろう。前述したように、アルナウト＝ギリエム・デ・マルサンの *Ensenhamen* には、Linaura の心臓が抜き取られたとも、彼の生殖器が女の食に供せられたとも書かれていない。従って、*Ensenhamen* の allusion をあたかも《心臓を食べる話》のひとつのヴェルジョンを伝えているかのように扱っている、ルジュヌをはじめとする多くの論者の考えは斥けなければならない⁴⁹⁾。男根を切り取られたドン・ファンの話と《心臓を食べる話》とは自ずと異なるからである。この自ずから異なる二つの話を、いささか強引ではあるが結構巧妙に結びつけて、『ギロン短詩』に描かれていたと思われる《心臓を食べる話》とその支えたる《fine amor》を、フィジカルな観点から戯画化したのがルノーの『イニョール短詩』であったといえればこの小論の結論になろうか。

註

- 1) 《心臓を食べる話》を扱う作品の流布状況を知るには、とりあえず、Gaston Paris, 《Le Roman du Châtelain de Couci》, in *Romania*, VIII, 1879, pp. 343-73と *Roman du Castelain de Couci et de la Dame de Fayel*, éd. John E. Matzke et Maurice Delbouille, SATF, 1936, Introduction, pp. XLVI-LXIII, LXXVI-XCVI が参考になる。諸作品間の系統関係とテーマの起源の問題については、このふたつのほかに、後者の序文 (p. XLXI, note 1) に挙げられている諸論文も参照すべきである。
- 2) 《心臓を食べる話》が《fine amor》を象徴する詩的テーマ《心の交換》と密接に関連している次第を、『クローシー城代とファイエルの奥方の物語』について明らかにしてみた筆者の小論があるので、参照していただければ幸いである——《L'échange

des cœurs et le thème du cœur mangé dans le Roman du Castelain de Couci et de la Dame de Fayel», in *Etudes de Langue et Littérature Françaises*, n° 36, Hakusuisha, 1980, pp. 1-15. とりわけギリエム・デ・カベスターニュの「伝記」「解題」と、『デカメロン』4日目第9話とを、ジャンルの問題との関連で割切丁寧に比較した新倉俊一氏の論文も示唆するところ大である——「ファブリオ、コント、ノヴェレ」、『講座比較文学』巻7（西洋文学の諸相）、東京大学出版会、1974, pp. 258-70.

- 3) Texte cité par G. Paris, *article cité*, p. 367, note 2. この話に付されたパリスのコメント (...l'amant meurt en Terre-Sainte) から窺えるように、「海を渡る」*mare transire* という表現には、「聖地に赴く」「十字軍に参加する」という意味があるようである。
- 4) 使用テキストは Renaut [de Beaujeu], *Le Lai d'Ignaure ou Lai du Prisonnier*, éd. Rita Lejeune, Acad. Roy. de Langue et de Littérature Françaises de Belgique, 1938.
- 5) 《Certes, chascune a dit a mi
Le non d'un tout seul chevalier;
Molt nous a faites avillier.
Et jou meïsmes l'ainc aussi,
Et vous trestoutes autressi!》(vv. 204-8)
- 6) *Ensi con tiesmoigne Renaus*,
Morut Ignaures, li bons vassaus. (vv. 621-2)
- 7) *Le Roman du Castelain de Couci et de la Dame de Fayel*, éd. J. E. Matzke et M. Delbouille, vv. 8106-9. 同様の言葉は、ギリエム・デ・カベスターニュの「伝記」「解題」にも、コンラット・フォン・ヴェルツブルクの『心臓譚』、ボッカチオの『デカメロン』4日目第9話にも見られる。

《Seingner, ben m'avez dat si bon manjar que ja mais non manjarai d'autre.》

(Vida-F^bIK-de Guillem de Cabestaing, in *Biographies des troubadours*, 2° éd. Jean Boutière, A. G. Nizet, 1973, p. 531)

E si-l respondet qe l'era estatz si bons e si saboros qe ja mais autres manjars ni autre beures no-il tolrian la sabor de la bocha qe-l cor G[uillem] de Capestaing li avia laissada.

(Razo-H-de Guillem de Cabestaing, *ibid.*, p. 539)

„so will ich Euch ein für allemal sagen,

daß ich nach solch edler Speise

ferner keine Mahlzeit mehr

genießen will.“

(Konrad von Würzburg, *Das Herzmaere*, übersetzt von Heinz Rölleke, Stuttgart, Reclams Universal-Bibliothek, 2855, 1976, vv. 490-3)

《...unque a Dio non piaccia che sopra a così nobil vivanda, come è stata quella del cuore d'un così valoroso e così cortese cavaliere come messer Guiglielmo Guardastagno fu, mai altra vivanda vada!》

(Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, Firenze, Le Monnier, 1965, p. 553)

- 8) 詳しくは註2)に挙げた拙稿を参照願いたい。
- 9) Lucien Foulet, 《Marie de France et les Lais bretons》, in *Zeitschrift für romanische Philologie*, XXIX, 1905, p. 54.
- 10) *Le Lai d'Ignaure...*, p. 72.
- 11) Roger Dubuis は、これを「ファブリオの中で最も卑猥な作品に置いても恐らくはその価値を損わないきわどいほめかし」*allusions grivoises qui ne dépareraient pas le plus gaillard des fabliaux* の一つに数えている——*Les Cent Nouvelles Nouvelles et la tradition de la nouvelle en France au Moyen Age*, Presses Universitaires de Grenoble, 1973, p. 378.
- 12) *Proverbes français antérieurs au XV^e siècle*, éd. Joseph Morawski, *CF-MA*, 1925, 1036°.
- 13) *Ibid.*, 1035°.
- 14) *Ibid.*, 2047°.
- 15) *Le Lai d'Ignaure...*, p. 36.
- 16) V. 191 は Alfred Jeanroy の書評 (*Romania*, LXV, 1939, p. 255) に従って、ルジューヌのテキスト (*Ne plaigne pas la [bon] fuison!*) を改めておいた。
- 17) *Le Lai d'Ignaure...*, p. 65.
- 18) *Article cité*, p. 54.
- 19) *Op. cit.*, p. 435, note 18.『放蕩者の短詩』は短詩の制作自体をテーマにした100行あまりの小篇で、ブルターニュの精華ともいうべき (*c'estoit de Bretagne la flors*, v. 57) 8人の貴婦人がうんちくを傾けて《con》を主題にした短詩を作った次第 (*《faisons du con le lai nouvel》*, v. 97) を語っている。Cf. *Les Lais anonymes des XII^e et XIII^e siècles*, éd. Prudence Mary O'Hara Tobin, Genève, Droz, 1976, pp. 347-58.
- 20) Per Nykrog, *Les fabliaux*, nouv. éd., Genève, Droz, 1973, p. 97.
- 21) 料理をふたつのもので構成する『短詩』のほうが《心臓を食べる話》の古態を伝えているとする Henri Hauvette の見解 (*《La 39^e nouvelle du Décaméron et la légende du cœur mangé》*, in *Romania*, XLI, 1912, p. 193, note 3) には、ルジューヌ女史 (*Le Lai d'Ignaure...*, p. 36 et p. 38) と同様、筆者も与しえない。料

20 『イニョール短詩』

理の材料を一つふやすことによつてまさに『短詩』は先行する《心臓を食べる話》のパロディたりえているからである。

- 22) Cf. L.Foulet, 《Marie de France et la Légende de Tristan》, in *Zeitschrift für romanische Philologie*, XXXII, 1908, p.214; R. Lejeune, *Le Lai d'Ignaure...*, p.44.

- 23) Thomas, *Les fragments du Roman de Tristan*, éd. Bartina H. Wind, Genève, Droz, TLF, 1960, Sn¹, v.782.

- 24) Coment dan Guirun fu surpris,
Pur l'amur de la dame ocis
Qu'il sur tute rien ama,
E coment li cuns puis li dona
Le cuer Guirun a sa moillier
Par engin un jor a mangier,
E la dolur que la dame out
Quant la mort de sun ami sout. (*Ibid.*, Sn¹, vv.783-90)

- 25) Cf. *Le Roman de Tristan par Thomas*, éd. Joseph Bédier, SATF, 1902-5, 2 vol., t. I, pp.51-3.

- 26) ...《Dame, bien sai
Que l'en ot fresaie chanter
Contre de mort home parler,
Car sun chant signefie mort;
E vostre chant, cum jo record,
Mort de fresaie signifie :
Alcon ad ore perdu la vie.》(*Les fragments...*, Sn¹, vv.818-24)

- 27) *Op. cit.*, t. I, p.297, note.

- 28) Cf. *Prosatori del Duecento—trattati morali e allegorici novelle—*, a cura di Cesare Segre, Torino, Einaudi, 1976, pp.111-2.

- 29) Cf. J. Bédier, *op. cit.*, t. I, pp.51-2; *The Saga of Tristram and Isönd*, tr. by Paul Schach, University of Nebraska Press, 1976, ch. 22.

- 30) ベディエは、《lai breton》たる『ギロン短詩』の存在を裏付ける allusion を他に二つ挙げている (*ibid.*, p.53).

——王アンセイスは、ブルターニュ人に『ゴロン短詩』を歌わせる。Fait devant lui un Breton viëler/Le lai Goron, comment il fu finé. (*Ansëis de Carthage*, vv.6146-7)

——妖精たちは、海岸に眠り込んでしまった Rainoart の宛を、『ゴルオン短詩』を妙やかに歌うブルターニュ人に変えてしまう。...en uu Breton/Qui doucement

harpe le lai Gorhon. (*Loquifer*, cf. Paulin Paris, *Roman de la Table Ronde*, t. I, pp. 11-2)

- 31) Cf. J. Bédier, *op. cit.*, t. I, p. 94 et Ernest Hoepffner, *Folie Tristan d'Oxford*, 2^e éd., Les Belles Lettres, 1943, vv. 361-2 :

《Bons lais de harpe vus apris,
Lais bretuns de nostre país.》

- 32) Cf. R. Lejeune, *Le Lai d'Ignaure...*, p. 69.

- 33) 例えば、マリ・ド・フランスや、《lai breton》の一つに数えられる *Graelent* の匿名作家の次のような口上と比較されたい。

De l'aventure de ces treis
Li auncien Bretun curteis
Firent le lai pur remembrer,
Qu'hum nel deüst pas oblier.

(*Eliduc*, vv. 1181-4, in *Les Lais de Marie de France*, éd. Jean Rychner, CFMA, 1971)

L'aventure du bon destrier,
l'aventure du chevalier,
com il s'en ala o s'amie,
fu par tote Bretagne oïe.
Un lai en firent li Breton,
Graalent Mor l'apela on.

(*Graelent*, vv. 727-32, in *Les Lais anonymes...*, éd. P. M. O'Hara Tobin)

- 34) 《Marie de France et les Lais bretons》, p. 55.
35) Cf. *Le Lai d'Ignaure...*, pp. 30-8 et 《Le personnage d'Ignaure dans la poésie des troubadours》, in *Bulletin de l'Acad. Roy. de Langue et de Littérature Françaises de Belgique*, 1939, pp. 140-72.
36) Chrétien de Troyes, *Le Chevalier de la Charrette*, éd. Mario Roques, CFMA, 1972, vv. 5783-9.
37) Cf. 《La date de l'*Ensenhamen* d'Arnaut-Guilhem de Marsan》, in *Studi medievali*, XII, 1939, pp. 160-71.
38) 《Le personnage d'Ignaure...》, p. 151.
39) J. François Raynouard, *Choix des poésies originales des troubadours*, 6 vol., 1816-21, t. II, p. 308 ; Jean Mouzat, 《Remarques sur *Linhaure* et sa localisation》, in *Mélanges offerts à Rita Lejeune*, 2 vol., Duculot, 1969, t. I, p. 214, note 2.
40) *Loc. cit.*, p. 214, note 6.

41) *Loc. cit.*, p. 308.

42) 《Le personnage d'Ignaure...》, p. 150.

43) Ignaure-Lin[h]aura という形の違いについて、ルジュューヌは、Tobler の説に従って、N'Ignaure の n が異化 (dissimilation) によって l に変わり、この l が一体化して Lignaura となったと推定している。また現に、ギラウト・デ・ボルネーリュとガウセルム・ファイディット (cf. *infra*, pp. 15-6) の写本には、Ignaures, Y-nhaure, Yngnaure, Inaures, Isnaure, Ignaure 等の l のないヴァリエントが多数認められる。Ignaure と Linhaura は、決して別の人物を指していたわけではないのである。

44) *Sämtliche Lieder des Troubadors Giraut de Bornelh*, éd. Adolf Kolsen, 2 vol., Halle, 1910-34.

45) 《Le personnage d'Ignaure...》, p. 157.

46) この点では、ラインバウト・ダウレンガの校訂者 Walter T. Pattison (*The Life and Works of the Troubadour Raimbaut d'Orange*, Minneapolis, 1952) も、M. Delbouille (《Les *senhals* littéraires désignant Raimbaut d'Orange et la chronologie de ces témoignages》, in *Cultura neolatina*, XVII, 1957, pp. 49-73) も見解を同じくする。ラインバウトが Linhaura という《*senhal*》で呼ばれる資格を十分に備えていたことを納得していただくために、デルブイユが引いている (*ibid.*, p. 63) ラインバウト自らアベラールと同じ運命にあったことを告白している——というよりは吹聴している——《gap》の一節を引いておこう。

D'aisso vos fatz ben totz certz :

Qu'aicels don hom es plus gais

Ai perduz, don ai vergoigna ;

E non aus dir qui-ls me trais ;

Et ai ben cor vertadier

Car dic tant grand encombrier.

.....
A dompnas m'en soi profertz

E datz, per que m'en ven jais ;

Si noc'ai poder que i joigna

En jazen, ades engrais

Solament del desirier

E del vezer, qu'als non quier.

(XXVIII, éd. W. T. Pattison, strophes II et VIII)

「このことは皆さんにはっきり 信じていただきましょう——恥ずかしながら、先生、男の一番の喜びの源を失ってしまったのです。だれに抜き取られたかは申し

上げられませんが、小生、気は確かですよ。だってこれ程いやなことを口にして
 いるのですから。……女性に身を委ねれば、それで喜びは湧きますよ。尤も、横
 になっても一体になる手だては全くないのですが、いつもただ欲し眺めるだけで
 大きくなっているだけなんです。小生には他に求めることはないのです。」

- 47) ガウセルムの詩作活動の開始時期を1170年よりも少し前とする J. Mouzat はこれ
 を斥け、ガウセルムが使った《senhal》もラインバウトを指すと看做している (*Les
 Poèmes de Gaucelm Faidit*, A. G. Nizet, 1965, pp. 31-2).
- 48) Cf. *article cité*, pp. 61-4.
- 49) ルジュースの他に、例えば G. Paris, *article cité*, p. 368 ; J. E. Matzke, 《The
 legend of the eaten heart》, in *Modern Language Notes*, XXVI, 1911, p. 1 ;
 M. Delbouille, *Le Roman du Castelain de Couci...*, Introduction, p. XLVII,
 note 1

〔付記〕 本稿で扱った『イニョール短詩』のルジュースによる校訂本は、名古屋大学
 の新村猛名誉教授に貸していただいたものである。また、早稲田大学の鷺田哲夫教
 授には、*Sermones parati* の一話の読解に関して、筆者の質問に答えていただい
 た。両先生の御厚意に恵まれなかったなら、この小論は陽の目を見なかったに違ひ
 ない。末筆ながら、ここに記して感謝の意を表する次第である、